



インピルフルキサム水和剤の葉面散布による チューリップ皮腐病防除

富山県農林水産総合技術研究センター 園芸研究所 まつおか じゅんいち たかがわ ゆうすけ
松岡 淳一*・高川 祐輔

はじめに

チューリップ球根生産の中心的産地である富山県では、主に水田の裏作として、秋（10～11月）に球根を植え付け、翌春に萌芽・開花を経た後、初夏（6月ごろ）に球根を収穫し、洗浄・乾燥後に貯蔵・出荷する作型が行われている。球根は生育期間を通じて圃場で肥大し、収穫・貯蔵工程を経て商品として流通するため、収穫期以降における球根の健全性および外観品質の低下は、生産・流通の両面で重要な問題となる。

チューリップ皮腐病（以下、皮腐病）は、*Rhizoctonia solani* AG-2-2 を病原とする病害で、2000 年代初頭から富山県のチューリップ球根生産において問題となってきた（多賀ら、2003）。本病では、球根外皮が腐敗・脱落し、著しい裂皮（図-1）を生じること特徴とする。また、球根肥大期以降に感染・発病する病害であり、罹病球根からの伝染の可能性は低く、圃場中に残存した病原菌が主な伝染源となる可能性が高いことが示唆されている（多賀ら、2005）。発病球では外皮の腐敗や裂皮により外

観品質が著しく低下し、外皮に長さ 1 cm 以上の裂皮が生じた球根は規格外品として扱われ、市場出荷ができなくなるため生産者の経済的損失に直結する。さらに、裂皮した球根は、鱗片がむき出しになることで貯蔵中にチューリップの球根伝染性を有する球根腐敗病（病原菌：*Fusarium oxysporum* f. sp. *tulipae*）などの二次感染を受けやすく、品質低下や被害拡大の要因にもなる。

本病菌は生育適温が 30℃ 前後と、主として萌芽期に発生するチューリップ葉腐病の病原菌である同種の *R. solani* AG-2-1（生育適温約 25℃）（中臣・金子、1971）と比べても、高温性であることが特徴である。このため、近年の球根収穫期における高温傾向を背景として、皮腐病の発生増加が懸念されており、安定したチューリップ球根生産を行ううえで重要な防除対象病害となっている。

皮腐病の病原菌が明らかになって以降、フルアジナム水和剤（2025 年 12 月登録失効）やインピルフルキサム水和剤の植付け前球根浸漬処理が有効な防除手段として示され、実用現場に導入されてきた。しかし、植付け前



図-1 チューリップ皮腐病による球根外皮の異常裂皮症状

左：掘り取り直後（外皮着色前）。

右：貯蔵中（外皮着色後）。鱗片にも褐色の陥没病斑が見られる。

Control of Tulip Bulb-coat Rot by Foliar Application of Inpyrfluxam Flowable. By Junichi MATSUOKA and Yusuke TAKAGAWA

（キーワード：チューリップ、チューリップ皮腐病、インピルフルキサム、葉面散布）

*現所属：農研機構 中日本農業研究センター